

二〇二五年一月二七日

豚汁に炊出し想ふ阪神忌
遺児はいま三十路のパパや阪神忌
阪神忌人の絆をな忘れそ
防災無線黙禱を告ぐ阪神忌

あひる
あひる
あひる
きよえ
こすもす

二〇二五年一月二六日

点検す防災リュック阪神忌
シリウスの今にも雫こぼしさう
仏花とす夫手遊びの冬菊を
殿を行く山道の寒さかな

やよい
うつき
よし女
うつき

二〇二五年一月二五日

炉火燃えて大梁の軋む家
足元は緋の絨毯や藪椿
見舞ひとは言はぬ存問あたたかし
宮守と世直し語る焚火かな

澄子
よし女
あひる
なつき

二〇二五年一月二四日

老い互ひ着膨れ励まし合ひにけり
飛機の灯の凍てし夜空に瞬きぬ
一筋の杣家の煙山眠る

あひる
康子
せいじ

二〇二五年一月二三日

ぴかぴかの皮靴並ぶ成人日
祖母に顔見せんと集ふ新成人

みきえ
せいじ

二〇二五年一月二二日

大正の模様硝子や冬日燦
硝子窓翳ると見れば雪しまく
蠟梅の一花に励む庭仕事

むべ
せいじ
うつき

二〇二五年一月二一日

米寿なる師の初釜に集ひけり
ものの芽の解れんとする力かな
爪先で逃げしあんかを探りけり

なつき
うつき
たか子

毎日句会みゆる選・二〇二五年一月一九日